

Title	守屋謙二書画展
Sub Title	The exhibition of calligraphy and paintings of Kenji Moriya
Author	西川, 寧(Nishikawa, Yasushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.359- 364
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0365

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

守 屋 謙 二 書 画 展

西 川 寧

9月の初旬から中頃にかけて西安碑林展があって私は前からの因縁でその世話をした。そのために8月のはじめから、よく呼びだされたり、原稿を書かされたりした。原稿も主催者たる交流協会の月報、新聞での前ぶれ、図録の解説、会場のパネル、NHKのテレビなどなど、どうやら、7、8篇におよび、そのうえ陳列のために、昔写した碑林の写真のネガを捜したり、平面図をかいたり、何のかのと引きずりまわされた。7月の暑いさかり1カ月の中国旅行のつかれも直りきらぬ間のことで、ちと閉口した。その挙句の碑林展だったが、ちょうどそれも終に近づいた9月の14日から19日まで、高島屋で守屋さんの個展が開かれた。ちょっと腰をぬかした形だったので、なかなか行くことが出来ず、最終の19日というに、それもやっとの思いで5時近くに家を出てもう閉幕というあぶない所を見せていただいた。それでも、せめてひと目と願った思いがはたせたのはたのしかった。



個展の名は主題のとおりだが、その時作られた図録の表紙には「洗竹居小品」と題されている。この方が実は個展の名としても、ふさわしいのであろう。その図録は四六版の小冊子だが、薄コバルトの表紙の中央に、自筆のこの五字が、同じ色に胡粉を入れた白っぽい字で浮き出している。きれいな本である。はじめに守屋さんの「ご挨拶」、次に安倍能成氏の「個展に寄せて」、そして画が27点、石仏のスケッチ2点、次に書幅が5点、

守屋謙二書画展

最後に略歴がのっている。愛すべき、たのしい冊子である。

守屋さんのことは、書品の読者には耳なれぬかもしれぬが、守屋さんは無論書家ではなく、画家でもなく、実は慶応文学部・美術史科の主任教授である。しかしこうした個展が開かれる位、書画をこよなく愛し、しらべ考えることはもとより専門だが、また自ら筆をとって書画をかくことを愛する人である。ついでにいえば、大垣のお家は明治期の文人趣味の風気に満ちていたらしく、邸内の亭には当時の文人の聯や額がたくさんかかっていたという。そんな雰囲気の中で中学時代から書を大野百鍊翁に学び、大学時代には画を岸田劉生に学んだそうだ。それからすでに50年を過ぎている。17年前の第4回日展には五科に書を出して入選されたことは誰かの記憶にのこっているのであろう。嘗てドイツに留学したときは、あたかも大戦の勃発となり、腰をすえてライプチヒ大学の講師となり、またその博物館で個展を開いたりして、前後6年も滞留した。「美学」や「日本の絵画」(独文・学位論文)の著書、パッサルゲ「現代美術史理論」、ヴェ



ルフリン「美術史の基礎概念」おなじ人の「古典美術」などの翻訳がある。妙なことを書き立ててしまったので、もう一つついでにいえば、日吉のお宅の玄関には木刻の鄧石如の篆書の聯がかかっている。また、たしか「亜蔬村舎」という表札風の小さな額が

そのかげにひっそりと懸っていたのを思い出す。



守屋さんの画は水墨淡彩というところであるが、墨の占める比重はなかなか大きい。題材はほとんど花奔だが、その葉にはよく没骨の墨が見え、そうでなければ花にも葉にも花器などにも淡墨の輪廓線が見える。輪廓の線などに骨法を見せる筆、また一種の戦筆を用いる所は文人画風だが、全体の淡泊な印象にはいわゆる水彩画的な風味がある。墨といい骨法という「つけたて」くさくも思えようが、つけたての観念性は微塵もなく、根から写生に立っている。また淡墨の輪廓のにじみの中に傅彩した姿は、いかにも劉生に出発したかと思えるところがあるが、この絵は張ったもの、満ちたものではなくて一途に清々とした、ハイカラなものである。そして表現の性質が、流れるところより静止した姿体をつなぎとめようとする。墨に潤うハイカラな立姿に、戦筆や骨法の依怙地がからむのである。全く匠気というもののない画面に、たのしんで没頭している作者のころである。清いものしか知らず、しかも依怙地に求めてやまぬころであろう。



書は行書が多く、字形に縦長が多い。横の仰勢と縦の右回転の筆が特色である。また筆のくいつきが強く、紙へのきしみがはげしい。こうしたい

かつい形をこの筆力がささえている。はげしい緊張で左へすべり出そうとする筆を、また字を、一筆ごとに、また一字ごとに右へ引きもどしながら立てていく一行。この葛藤が又別の緊張を紙幅の上に生み出してくる。長身の背を少し前かがみにしながら地面に抗して立つといった風格である。感情を流し出すというより、足をふみしめて立つというところである。そこがこの書のおもしろ味である。



書幅に

閑庭一隅植芭蕉。雨後伸長幾重葉。

翩翩揺風白日夢。碧玉板上青蛙跳。

というのがある。落款に「謙戯作」とあるが、この詩はつまり守屋さんの自作である。平仄も何もないのですと笑っているが、守屋さんは昔からよくこうしたものをたのしんでいる。昔、ローマあたりを歌ったものを二つ三つ示されたことがある。カテドウラールの荘厳をよんだり、僧院の中庭の噴水の静けさをうたったりしたものがあつたことをおぼえている。こんどの芭蕉の詩は、又別に一幅、淡墨の芭蕉に甘草をあしらった半切にも賛として書いてあるのがあつた。

この書幅の方は書作品中もっとも熱情を發揮したものであろう。きしんだ筆が紙に食いついたものでほんとうに食いついてしまって離れそうにもないと思うと、やっと離れて渴筆でおわるといったところなどがある。この幅は書幅の中でもっともおもしろい。ところで、画賛の方は、同じような筆意でやりながら余程淡泊で、気軽に出てくる。水気



の多い芭蕉の葉が長くのび、根本に淡彩の甘草の一むらがよりそうている。その細長い幅の左に一行に、葉の上にかけてこの賛がかいてある。この賛が書幅の場合よりさっぱりしているのは、何ととっても画の淡墨の多い水ぼさに引かれたのであろうが、もう一つは画がさきに出来て、そこへかこうというとき人情自然に気軽になるのである。これは私自身経験するところである。さて書幅となると、どんなに匠気を絶すといっても、やはり書を書くというところは別なのである。書というものが、それほど精神の躍動を端的に出してしまうのである。画の方は書が主ではないというだけで気軽なるのであろう。

文人画にはよく賛をする。画の足らぬところを詩で補うと説明する人がよくあるのだが、私はこれは間違っているとおもう。画家は画がかきたくて画を書く。かきおえるとまだ胸にのこっているものがある。画以外の詩的感興である。そこで詩を書く。画に詩を書きつけようとする程の人は書にだって異常の感興を持っている。だから賛をする場合、書的感興が大いにわく。或は、そうでなくて、画をかき上げると、そこへ詩よりも書がほしくなる、或は詩と書との感興が一しょにむらむらと起き上るのかもしれない。それだけに賛をするときには特に解放されたよろこびが動くのであろう。また書だけのときは、かりに見せようという気がなくても、書がもともと端的すぎるので、なかなか解放とはいかないのかもしれない。私は「あなたなどは筆をとれば書になり切れる」と人にいわれて、ぞっとしたことがある。そうあるべきだが、そうはいかぬ。だがいたづらの画に字を書くときの方がどうも気楽にいき、また少しよく出来るようだ。守屋さんの場合、その書のあくどさはなかなかおもしろい。しかし画には、それだけの解放感はいなめないのだらう。

とにかく、画にしても書にしても、これほど世の中に拘らず、自分の感興そのままをそれだけに出している、この依怙地の姿を不思議な感動で見守るのである。今の書家にこれだけの自分を恃むところがあつたらどうだ

守屋謙二書画展

ろう。

(書家)

[後記]

守屋先生の古稀記念論文集編纂の計画を私たちがきいたのは昨年秋だったかと思う。その時から父、西川寧は、年来取組んでいた西域出土魏晉人墨蹟の研究の一部をあらたにこの論文集のためにまとめるべく準備していたらしい。所がこの研究のために必要な、欧州の美術館にある西域出土墨蹟の原物実査の念願が今年に入って急に果せることとなり、論文集への原稿をまとめ得ないままに、5月10日、欧州旅行への途についた。

かわって、ここに掲載の一文は、先生の一般に余り知られていない一面を論文集上に紹介したいとて、出発前に父が私に託して行ったもので、昭和40年9月、東京日本橋・高島屋で開かれた「守屋謙二書画展」について書品166号誌に執筆した父の旧筆である。

(西川杏太郎記)